

東京女子大学現代教養学部国際関係専攻

特別入試合格者推薦図書（2020年度）

この推薦図書リストを作った直接の目的は、1年次演習でブックレポートを課す場合に専攻レベルで学生に指針を与え、多少とも共通の基盤を共有できるようにするためでしたが、特別入試に合格した高校生に入学前の課題図書リストとしても配布するようになりました。ブックレポートに限らず、自分の勉強の裾野を広げるためにリストを活用してください。

図書の選定には専攻の教員が参加しました。基本的に、現在入手可能な本、比較的低価格の本を中心に選んであります。教員名の後のカッコの中には専門分野ないし3・4年次演習のタイトルを、署名の後ろのカッコには書籍のジャンルを書いてあります。

黒沢文貴（近現代日本研究（政治・外交））

**吉田一彦『日本書紀』の呪縛（集英社新書、2016年）〈日本史〉**

2019年には元号が平成から令和となり、天皇の代替わりがおこなわれました。みなさんにとっても、記憶に新しいことだと思います。嵐見たさに皇居前に足を運んだ人もいるかもしれません。代替わりにともないさまざまな儀式がとりおこなわれ、日本の、そして天皇制度の伝統を感じられた人もいるでしょう。

では、その伝統とは何でしょうか？ 何が伝統なのでしょう？ また物事には始まりがありますが、伝統という言葉聞いて、みなさんはいつの時代からのことを思い浮かべるのでしょうか？ さらに伝統とはまったく変わらないものなのでしょうか？ 今回の代替わりにともなう一連の儀式は、奈良時代や平安時代とまったく同じものなのでしょうか？ もし違ふとしたら、なぜ違いが生まれることになったのでしょうか？

古代以来の日本の歴史の中で、天皇制度はたしかに一貫して存在するものです。でもこれまでの歴史の授業の中で、天皇をとりまく政治制度や社会制度などが大きく変化してきたことを、みなさんはすでにご存じのはずです。では今後、この天皇制度はどのような姿で存続していくのでしょうか？ そのときに伝統はどのように姿を変えるのでしょうか？

天皇の代替わりという、めったに起きないであろう歴史を今年目の当たりにしたわけですから、せつかくのこの機会に、日本の歴史について、そして天皇制度の過去・現在・未来の姿について、この国の主権者であるみなさんも、少しは思いを巡らしてみてもいいのではないのでしょうか？ この本はその際に、きっとお役にたつと思います。

森万佑子（朝鮮研究）

**岡本隆司『君主号の世界史』（新潮新書、2019年）〈東アジア関係史〉**

この本は、世界各国の君主号に着目して世界史の流れを新たに叙述したものである。「チャールズ皇太子」は、エ

リザベス女「王」の息子なのに、なぜチャールズ「皇」太子と呼ぶのだろうか。天皇、皇帝、王などといった君主の呼称、特に「王」や「皇」の文字は、「世界史を貫く背骨」であり、その国や地域の人々の世界観の表現であると同時に、国際関係・国際政治における外交交渉や各国の戦略の帰結でもある。

国際関係を学ぶことは、世界史の知識が理解の基礎として必要となるが、その世界史の知識も単にヨーロッパの歴史だけを基準としたものだけではなく、中国を中心とした東洋とヨーロッパ世界の出会いに着目し、広い視野で理解しようとする視点を意識して欲しい。そのため、この一冊を推薦する

## 湯浅成大（アメリカ研究-政治学、アメリカ政治論）

### **前田健太郎『女性のいない民主主義』（岩波新書、2019）〈政治学〉**

政治学の理論は、男女の区別をつけず、人間をある意味無色透明な個人として扱ってきた（例：選挙における一人一票の原則を論じるときに男女の区別は持ち込まない）。けれども男女の区別を持ち込まない「中立」は、現実には政治学理論からの女性の排除と裏腹であった（同様に政治の世界からの女性の排除でもある）。本書は、ジェンダーの視点を導入することで、現在の政治学理論、政治制度のもつ意味がどう変わってくるかを考察した刺激的な書物である。本書は、単にジェンダーの視点を取り入れ、「女性のいない政治学」の問題点を指摘するだけでなく、さまざまな政治学概念の見直しをおこなっており、政治学の入門書的性格も持っている。高校では学ばない、政治学という学問を知るための好著である。

## 小檜山ルイ（アメリカ研究-人文系、女性史）

### **アン・ムーディ著（樋口映美訳）『貧困と怒りのアメリカ南部』（彩流社、2008年）〈女性史〉**

本書は、1968年に出版されたアン・ムーディの自伝 *Coming of Age in Mississippi* の全訳である。この自伝は、参考書としてアメリカ合衆国の高校や大学で広く採用されてきたという。アメリカ合衆国南部における日常と一九六〇年代前半の公民権運動の現実を伝える資料として、評価されてきた。

1960年代前半のアメリカにおける公民権運動というと、現代の日本の高校生は、まずマルティン・ルーサ・キング牧師が1963年のワシントン大行進で行った有名な演説「私には夢がある」を思い出すことだろう。本自伝にもワシントン大行進に参加したエピソードはあるが、そこに登場するキング師は、白人牧師の公民権運動への賛同者である。「私には夢がある」と語ったキング牧師ではない。公民権運動は、マルティン・ルーサ・キングだけで代弁させることはできない広がりを持っていたのだ。

本書は、南部ミシシッピに生まれ育った黒人女性のミクロな視点から、公民権運動に至るまでの社会状況と公民権運動の実際を描く。日本語タイトルにあるように、1950年代、60年代に南部黒人女性が経験した「貧困と怒り」とはどのようなものであったか、差別はどのような権力構造をうみ、「貧困と怒り」につながったかを理解できるだ

ろう。

### 聶莉莉（文化人類学、中国研究）

**清水昭俊（編）、『周辺民族の現在』、（世界思想社、1998年）〈文化人類学〉**

この本は、「周辺民族」という角度からいまの世界を認識する書物である。周辺民族とは、人口規模が小さい、一般に知られていない、そして国際政治や、国際経済、情報通信などによって構成されている世界システムから排除されている民族のことである。

本書は、11名の人類学者の文章を収録した論文集である。人類学者たちはそれぞれ、アフリカのボツワナ、スーダン、北米のカナダ、中東のアフガニスタン、東南アジアのフィリピン、東アジアの日本などで行った実地調査に基づき、周辺民族の状況を考察し紹介した。

周辺民族の現在を理解することの意味は、編者の清水昭俊氏が書かれた通りである。

「周辺民族は、世界の構造の中でほとんど見るべき役割を果たしていないがゆえに無視してよい存在なのではない。事実は全く逆である。彼らは世界の構造的な中心から不可視にされた存在であり、それゆえに、彼らの存在自体が世界の構造の不可視の側面を代表している。とりわけ、周辺民族が周辺民族という地位へと周辺化された歴史的過程は、現代世界の隠れた構造を明らかにする。この意味で、不可視の存在である周辺民族を認識することなしには、現代世界を理解することはできない。」

国際関係を学ぶことは、世界の中心や、国家間の関係のみではなく、「周辺」や、草の根の視点からも、併せて学ぶべきであることから、この一冊を推薦した。

### 西村もも子（国際関係論、国際政治経済）

**E.H.カー著（原彬久訳）『危機の二十年：理想と現実』、（岩波文庫、2011年）〈国際関係論〉**

国際政治学における古典的名著は何かと問われた際に必ず挙げられるのが、本書である。第一次世界大戦後の講和条約であるヴェルサイユ条約の締結から、第二次世界大戦前夜まで20年間に見られた国際政治観を分析することを通して、なぜ国際社会は国際連盟を中心とする国際平和の実現を目指したにもかかわらず失敗に終わったのか、その要因を明らかにしている。そして1939年にこの書物が刊行された直後に、世界は二度目の大戦を迎えることとなる。

大学では、これまでに学んできた世界史や日本史の流れを、様々な専門的な観点から見直すことが求められる。それと同時に、なぜ国家は戦争をするのか、なぜ平和は実現されないのか、なぜ国家間に貧富の差が生じるのかといった現実的な問題を考察することとなる。その出発点として、本書を読み解くことを通じて、国際政治における現実と理念の双方を踏まえた視点はどうかあるべきか、是非考えてもらいたい。

## 根本和幸（国際法）

### 最上敏樹『いま平和とは一人権と人道をめぐる9話―』（岩波書店、2006年）〈国際法〉

みなさんは、「平和」という言葉を聞いて何を思い浮かべるだろうか。「戦争が無い状態かな」と答える人も少なくないだろう。では、戦争がなければ世界は平和なのだろうか。例えば、南太平洋の島国キリバスでは、毎日、満潮になると地面から海水が染み出し、膝の上まで浸水するという。この状況は「平和」と言えるのだろうか。どうやら「平和」という言葉には、いろいろな意味が含まれているようである。

この本は、その「平和」について、国際法や国際機構という平和を作る側だけではなく、核兵器の問題やパレスチナ問題において平和を奪われた側にも光を当てて考察している。この本を読むことで、今、ニュースで報じられている国際社会の出来事を深く理解できるだろうし、さらには、これから東京女子大学で国際関係を学ぶときの知的なヒントを手に入れることができるだろう。

## 家永真幸（アジア国際関係論）

### ベネディクト・アンダーソン著、白石隆、白石さや訳『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』（書籍工房早山、2007年）

私たちがいま暮らすこの世の中は、地球が「国家」に分かれていて、私たちはそのどれかに「国民」として所属することがさも前提かのように動いています。しかし実際には、地球を国家に分けたり、私たちをどこかの国民に分類したりするための、絶対的な根拠や基準があるわけではありません。本書は、「国民とはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体である」と喝破し、ナショナリズム研究の基本書ともされる著作です。「国民」が「国家」を構成するという、今日の世界では当たり前となった状態は、なぜ、どのようにして生まれてきたのかについて、出版物の流通や博物館の役割などにも着目しながら、本書は様々な見方を教えてくれます。ただし、いきなり読むには難解なので、大澤真幸編『ナショナリズム論の名著50』（平凡社、2002年）所収の若林幹夫による解説を先に見ても良いかもしれません。

## 茂木敏夫（中国研究）

### 金谷治『中国の思想を考える——未来を開く伝統』（中公新書、1993年）〈中国思想〉

中国思想の碩学により、わかりやすく記された本書では、中国思想の重要な概念が現代の語り口で再構成されている。長い歴史の中で連綿と維持されてきた思想が、決して古臭いものではなく、現代においても、そして将来の人類社会にとっても、意味を持ちうるものであることを示している。世界でますます存在感を示しつつある中国について、彼らの思考の根底にある価値観の、その可能性と限界について考える機会を提供してくれるだろう。

## 尾尻希和（比較政治学）

**エリザベス・アボット著（樋口幸子訳）『砂糖の歴史』、（河出書房新社、2011年）〈比較政治学〉**

あなたは、紅茶を飲むときに、砂糖を何杯入れますか？体がだるいとき、ちょっと風邪気味るとき。少し砂糖を入れた、あたたかいミルクティーほど、体を癒やしてくれるものではありませんよね。

紅茶に、コーヒーに、ケーキに、そしてチョコレートに入っている砂糖。私たちにじつに身近な食品ですが、私たち人類の「砂糖への欲求」が、世界史を大きく変えたことはご存じでしょうか。

ある人は、サトウキビ畑の開墾のためにやってきたヨーロッパ人に土地を奪われ、先祖代々のトウモロコシ畑を失いました。彼とその仲間はヨーロッパ人の奴隷となりましたが、多くが過重労働で死ぬか、もしくはヨーロッパ人が持ち込んだ病気に耐性がなかったために病気にかかり、倒れていきました。そして何世代か後になって彼の部族は死に絶えました（カリブのタイノ族）。

ある人は自分の住んでいた村である時とつげん拉致され、家族から引き離され、船に乗せられ、何ヶ月も旅した後に見知らぬ土地に連れてこられました。そして日々、わずかな食糧と引換えにサトウキビの収穫や圧搾などの重労働に従事させられました（アフリカ人奴隷）。

本書を読めば、「砂糖がもたらした恩恵と災厄」の矛盾に気付くでしょう。そしてその矛盾は、現在に至るまで完全には解決していないのです。本書の「分厚さ」に臆することなく、歴史の目撃者になってください。

## 青木 深（日米比較研究）

**シドニー・W・ミンツ（藤本和子・編訳）『[聞書] アフリカン・アメリカン文化の誕生』（岩波書店、2000年）〈文化人類学〉**

「黒人奴隷」を人間として理解する、とはどういうことなのだろうか。

この本は、1939年生まれの日本人女性の作家・翻訳家（みなさんのお祖母さんと同世代？）が、1922年生まれのユダヤ系アメリカ人男性の人類学者を訪ね、彼が半生をかけて研究してきたカリブ海域のアフリカ系アメリカ文化について語ってもらった作品だ。共同体から引き剥がされ、南北アメリカで「黒人奴隷」となった人びとは、なにも頼るものがないところから共通の言葉や食べるものをつくりだし、愛し合う人と出会って家族を形成し、信仰や音楽の記憶を呼び起こしながら、生きるよすがとなる文化をあらたに生み出してきた。藤本さんとミンツさんの対話をじっくり読むことで、南北アメリカにおける奴隷制と現代資本主義世界との歴史的関係や、黒人奴隷として非人間化・商品化されてきた人びとの生を見据えるきっかけをつかんでほしい。

永原歩（言語学・韓国語教育、1年次演習）

**K.デイヴィット・ハリソン（川島満重子訳）、『滅びゆく言語を話す最後の人々』（原書房、2013年）〈言語学、文化人類学〉**

言語が滅びるときというのは、おおむねその言語の最後の話者が亡くなるときである。英語が世界共通語として多くの話者や学習者を抱える裏で、この瞬間にも多くの言語が消滅していく。その背景を突き詰めていくと、現代の政治的、経済的な問題や資本主義社会のしくみ自体が根本にあると考えられる。言語が滅びるということは、その当事者にとって何を失うことになるのか、そして当事者ではない者にとってどのような意味があるのか。言語を通じて、民族、国家、政治、経済などに思いを巡らせずにはいられない1冊であり、国際関係や文化人類学に関心がある人にぜひ読んでいただきたい。